

〔原 著〕

## がん終末期の妻と死別して独居になった高齢男性の 新たな日常性構築プロセス

浅野 志保<sup>1)</sup> 古瀬みどり<sup>2)</sup>

### 要 旨

本研究は、がん終末期の妻と死別して独居になった高齢男性の新たな日常性構築プロセスを明らかにすることを目的とした。対象者は、緩和ケア病棟でがん終末期の妻を亡くし、死別後5ヶ月以上が経過した高齢男性であり、死別前は夫婦二人暮らしの者とした。対象者10名に半構造化面接を行い、逐語録を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにより分析した。その結果、がん終末期の妻と死別して独居になった高齢男性の新たな日常性構築プロセスには【生活立て直し行動】、【死別認識】、【周囲との関係性】、何十年と生きてきた中で獲得してきた【もてる資源】があった。【死別認識】、【周囲との関係性】、【もてる資源】は【生活立て直し行動】の推移に影響していた。以上のことから、高齢男性にとって〈“納得できた”〉と思える看取り、【もてる資源】への着眼、〈区切りとしての葬送儀礼〉や〈長年のスタイル維持〉の価値観を尊重した関わりが日常性構築プロセスにおいて重要と示唆された。

キーワード：がん、高齢男性、日常性構築、配偶者との死別

### 1. 緒 言

がんは昭和56年以来わが国の死因第一位（厚生労働省，2018）であり、がん患者と死別する家族は数多く存在する。がん死亡率が上昇する60歳代は、家族周期における成熟期にあたり、子どもが独立し夫婦2人だけの生活になることが多い（鈴木，渡辺，2012）。高齢男性の中には、60歳以降社会の第一線からの引退にも重なる時期に、がん終末期の妻に先立たれ、夫婦のみの世帯から独居への移行を余儀なくされる者もいる。

死別の経験はストレスを与え、高い頻度で感情的、家族的、経済的な問題を伴い（Kirby, Kenny, Broom et al., 2018）、周囲から孤立し通常の生活が困難になる場合もある（Milberg, Olsson, Jakobsson

et al., 2008）。配偶者との死別経験は人生において最もストレスフルな出来事（Holmes, Richard, 1967）とされ、配偶者を失った遺族やソーシャル・サポートの低い遺族は、死亡率や自殺率が高い傾向にある（立野，山勢，山勢，2011）。よって、がん終末期の妻と死別し独居になった高齢男性が、死別後の状況の変化に応じ新たな日常性を構築していくことは、生活者として健やかに老いる上で重要課題であると考える。

先行研究（東，永田，2005；鈴木，滝川，2005；大島，村岡，2007；近藤，佐藤，2007；黒江，辻河，2011；室屋，田島，2013）は、子育て世代や高齢期の男性を対象としている。その多くが死別後の心理的側面に焦点を当て、妻の亡くなった理由を限定せず報告している。そのため、夫婦で余生を送る矢先のライフステージにある比較的若い高齢男性が、がん終末期の妻に先立たれ、妻の死に伴って生

1) 山形大学大学院医学系研究科看護学専攻博士後期課程

2) 山形大学医学部看護学科

じる役割や人間関係の変化などの事態にどのように対応しているのかは明らかにされていない。加えて、妻との死別を機に夫婦のみの世帯から独居へ移行しても、家族としてどのようにあり続けるかという視点での研究も必要と考える。本研究の今日的意義として、夫婦二人で暮らし、がん終末期の妻に先立たれ独居になった高齢男性という特徴を有する対象者だからこそ、新たな日常性を構築していくプロセスを明らかにすることが、家族周期の移行を支える実践において重要となる。

そこで本研究は、がん終末期の妻と死別して独居になった高齢男性の新たな日常性構築プロセスを明らかにすることを目的とした。本研究に取り組むことにより、がん看護や緩和ケア領域における家族支援への実践的な示唆を得られるものと考えられる。

## II. 用語の定義

### 1. 高齢男性

本研究における高齢男性とは、定年退職前後に妻との死別を経験した、いわゆる高齢期とされる『65歳以上～70歳代の男性』とした。

### 2. 日常性

本研究における日常性とは、国語辞典（山田，2012）の定義を参考に、『妻との死別後自分なりに安定した生活を送っている状態』とした。

### 3. 終末期がん患者

本研究における終末期がん患者とは、『がんの病状進行に伴い、看取り目的で緩和ケア病棟に入院した患者』とした。

## III. 研究方法

### 1. 研究デザイン

質的記述的研究デザイン

### 2. 対象者

対象者は、緩和ケア病棟でがん終末期の妻を亡くし、死別後約半年～2年が経過した65歳以上～70歳

代の男性であり、死別前は夫婦二人暮らしの者とした。死別時期に関しては、死別後の悲嘆に関する報告（Holly, Paul, 2008）に基づき心身の負担を考慮した。また、時が経つにつれ記憶が曖昧になるため死別後経過期間に上限を設けた。認知症等でコミュニケーションに支障がある者や精神的に著しく不安定なために研究の施行が望ましくないと医師が判断した者は除外した。

### 3. 研究期間

2018年1月から同年8月。

### 4. 調査の手続き

がんの死亡率は60歳代から上昇し、男性の方が年長者の夫婦が多い。そのため、60～70歳代の女性患者を選定対象とし、退院患者名簿から入院中既婚で夫が生存していた女性を対象に全てリストアップした。次に、看護師長より研究対象候補者へ電話にて研究趣旨の説明、および年齢が65歳以上～70歳代に該当しているか確認してもらった。その後、研究の趣旨に自発的に同意をした者の紹介を受けた。後日、研究者が電話にて説明を行い口頭で同意を得た。面接当日は、研究者が文書と口頭で説明を行い、同意の署名が得られた対象者に面接調査を実施した。対象者の都合に合わせて、面接の日時と場所を決定した。

### 5. データ収集方法

対象者10名に半構成的面接法を実施した。面接内容は、『がん終末期の妻と死別してから現在に至るまでの生活について』である。現在に至るまでどのような気持ちを抱いたのか、どのようにして生活状況と健康状態に対処したのか、どのように自分の将来と人生を考えているのか、周囲のサポート状況について語ってもらった。面接回数は1人1回、面接時間は60～180分程度とし、対象者の同意を得てICレコーダーに録音した。面接場所はプライバシーが保護される病院内の個室または自宅で行った。

### 6. データ分析方法

分析方法は、人間の相互作用の変化や動きを説明できる質的分析手法の一つである修正版グラウン

デッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach : M-GTA) (木下, 2007) が適していると判断し採用した。M-GTAでは分析テーマと分析焦点者を設定する。分析テーマの設定とは、データに密着した分析を行うために研究テーマを Grounded on dataの分析がしやすいところまで絞り込むことである。本研究の分析テーマは『妻との死別後どのように生活を立て直していったのか』、分析焦点者は『がん終末期の妻と死別して独居になった高齢男性』とした。具体的な手順は次の通りである。ICレコーダーに録音した面接内容から逐語録を作成した。作成した逐語録から分析テーマに関係のありそうな部分に着眼し、概念を生成した。分析ワークシートを使用し、概念、概念の定義、ヴァリエーション、理論的メモを記載した。概念や定義は追加されるヴァリエーションとの関係で的確に表現されるよう補足修正、または削除し、新たな概念生成を行った。解釈が恣意的に進まないよう、他の面接データとの類似、対極の視点で継続比較分析を実施した。はじめに新たな日常性構築における具体的な行動を明らかにするため、死別後自分なりのペースを掴んでいる事例から分析した。妻および別居家族との関係性が良好とされた事例、対極例として家族との関係性が希薄で妻任せであった事例を分析し、死別後独居であっても死別後の主な支援者と思う者は誰か、社会との繋がりはどうかを検討した。この過程で解釈、定義、概念名がデータに密着したものであるか検討し、概念を決定した。20程度の概念が生成されたところで、新たな概念生成と並行し、概念間の相互関係を考えサブカテゴリー、カテゴリーを生成した。最後にカテゴリー同士の関係性を検討して図式化し、それを文章化したストーリーラインを作成した。なお、本研究では理論的飽和化を目指し、データの分析を行いながら対象者を追加した。対象者10名のデータを分析し終えた時点で新しい概念が生成されないと判断したため、対象者の追加を終了した。

## 7. 真実性の確保

質的研究の真実性を研究者がチェックし、立証するための方法には、『反対あるいは別の解釈を探すこと』、『専門家による検討』、『監査のためのあしあとあるいは決定に至るあしあと』、『濃厚な記述』、『振り返り』がある (Holloway, Wheeler, 2006)。『反対あるいは別の解釈を探すこと』については、データの解釈が恣意的に進まないように他のデータとの類似、対極の視点での継続的比較分析を行った。M-GTAの分析においてスーパーバイザーの役割が重要である (木下, 2003)。『専門家による検討』については、分析テーマの設定、概念生成、結果図やストーリーラインの作成において、M-GTAに精通した家族看護学を専門とする大学教員によるスーパービジョンを得た。『監査のためのあしあとあるいは決定に至るあしあと』、『濃厚な記述』、『振り返り』については、概念生成中に気づいたことや疑問、概念修正の理由など分析ワークシートの理論的メモに残した。また、分析ノートを作成し、対象者の語った内容の意味や自らのアイデアを整理し、解釈、定義、概念名がデータに密着しているのか検討を繰り返し行った。

## 8. 倫理的配慮

本研究は、山形大学医学部倫理審査委員会 (承認番号: 第362号) およびA病院倫理審査委員会による承認を得てから実施した。対象者には書面と口頭にて本研究の趣旨や内容を説明し、研究参加に同意する場合、同意書に署名を得た。研究への参加は対象者の自由意思によるもので、研究参加の拒否や途中辞退も可能であり拒否により何ら不利益を生じないこと、得られたデータは他者が目にはしないように厳重に保管して本研究以外で使用しないこと、学会および論文等で発表する際は個人および施設が特定されないよう匿名化することを説明した。データ管理はインタビュー、逐語録作成、データの粉碎消去に至るまで筆頭著者が責任をもって行った。体験を語ることで心理的負担が生じるリスクについては、質問に答えたくない場合は答えなくてよ

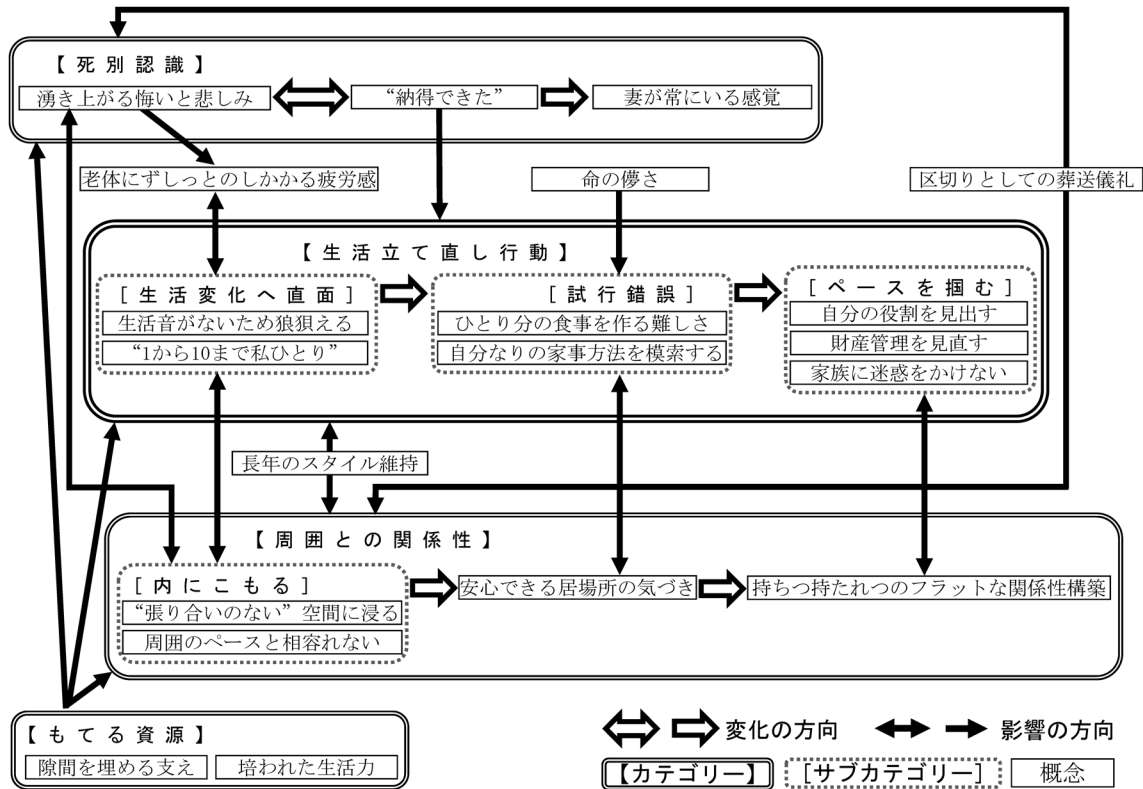


図1. がん終末期の妻と死別して独居になった高齢男性の新たな日常性構築プロセス

表1. 対象者の概要

| 対象者 | 年代   | 死別後、独居であっても本人が支援者と思う者 |
|-----|------|-----------------------|
| 1   | 60歳代 | 娘、孫、友人                |
| 2   | 70歳代 | 娘・息子夫婦、孫              |
| 3   | 60歳代 | 友人                    |
| 4   | 70歳代 | 友人、町内会の人              |
| 5   | 70歳代 | 息子夫婦                  |
| 6   | 70歳代 | 娘、友人                  |
| 7   | 70歳代 | 息子夫婦、孫                |
| 8   | 60歳代 | 娘                     |
| 9   | 60歳代 | 娘・息子夫婦、孫              |
| 10  | 70歳代 | 友人                    |

いことを保障し、面接中および終了後も配慮して関わった。

#### IV. 結果

4カテゴリー、4サブカテゴリー、20概念が生成された。分析結果を文章化したストーリーラインとそれを説明する結果図（図1）を示した。本文中では【】はカテゴリー、〔〕はサブカテゴリー、〈〉は概念を示し、“ ”はデータ内の言葉や表現そのものを概念とするin-vivo概念に使用した。「斜

字」はヴァリエーションを示した。

#### 1. 対象者の概要

対象者の年齢は60歳代4名、70歳代6名、全員が妻と死別後他家族員と同居せずひとりで生活を続けていた。死別から面接までの期間は5ヶ月～1年10ヶ月であり、本人の都合により半年に満たない者も対象に含まれた（対象者の概要は表1を参照）。

#### 2. ストーリーライン

がん終末期の妻と死別して独居になった高齢男性の新たな日常性構築プロセスには【生活立て直し行動】、【死別認識】、【周囲との関係性】、何十年と生きてきた中で獲得してきた【もてる資源】があった。高齢男性は【死別認識】や【もてる資源】の影響を受けながら【周囲との関係性】の変化に対応し、別居家族や同年代の人々との相互作用の中で【生活立て直し行動】がとれるようになった。高齢男性にとって自分のできる範囲の中でがん終末期の妻に対してできるだけのことはしてあげられ〈納得できた〉という認識が、〔生活変化へ直面〕しながらも〔試行錯誤〕し〔ペースを掴む〕【生活立て



直し行動】の推移に影響していた。

新たな日常性構築が進んでいった者の【死別認識】には、別居家族やソーシャルサポートからの〈隙間を埋める支え〉や何十年と生きてきた中で獲得してきた〈培われた生活力〉といった【もてる資源】の充足、妻を弔う〈区切りとしての葬送儀礼〉が影響した。【死別認識】は〈湧き上がる悔いと悲しみ〉と〈“納得できた”〉を行き来しながら〈妻が常にいる感覚〉へと推移し、〈“納得できた”〉認識が【生活立て直し行動】の推移に影響した。死別直後の【生活立て直し行動】は、〈生活音がないため狼狽える〉〈“1から10まで私ひとり”〉といった〔生活変化へ直面〕していた。夫婦二人で過ごしてきた〈長年のスタイル維持〉の信念の影響を受けて、〈ひとり分の食事を作る難しさ〉を感じながらも〈自分なりの家事方法を模索する〉ことで〔試行錯誤〕を繰り返すようになり、さらに余生をいかに生きるかと〈命の儚さ〉を考えることで、別居家族との距離感を保ち〈自分の役割を見出す〉〈財産管理を見直す〉〈家族に迷惑をかけない〉〔ペースを掴む〕行動がとれるようになっていった。独居であっても支援してくれる【周囲との関係性】は、死別直後〈“張り合いのない”空間に浸る〉ことや〈周囲のペースと相容れない〉ことで〔内にこもる〕状態を保っていた。〈長年のスタイル維持〉の信念を貫きながら、〈隙間を埋める支え〉へのありがたさに気付き、〈区切りとしての葬送儀礼〉を経験することで元々存在した〈安心できる居場所の気づき〉が得られ、相手に情けをかけられるだけではない〈持ちつ持たれつのフラットな関係性構築〉ができるようになっていった。

一方、日常性構築滞りの場合は、〈湧き上がる悔いと悲しみ〉が強く〈老体にずしっとのしかかる疲労感〉が持続していた。また〈長年のスタイル維持〉の信念を固持し、【もてる資源】が充足しておらず、〔生活変化へ直面〕している時間が長く〔内にこもる〕状態が続いていた。

### 3. 各カテゴリーとヴァリエーション

#### 1) 生活立て直し行動カテゴリー

本カテゴリーはコアカテゴリーである。孤独の中で主体的な行動を起こせずにいる〔生活変化へ直面〕、失敗を繰り返しながら工夫や自分なりの方法を取り入れていく〔試行錯誤〕、先々を見越した行動が主体的にとれるようになる〔ペースを掴む〕から構成され推移した。

①〔生活変化へ直面〕は〈生活音がないため狼狽える〉〈“1から10まで私ひとり”〉から成る。

〈生活音がないため狼狽える〉では、老後は妻に看取られたいと思っていたが、予期せず妻ががんで先立ったことで、生活の中で何気なく聞こえていた家事動作の音が聞こえず、自分の生活スタイルの変化に絶望して行動を起こせずにいたことが語られた。「女房がぱたぱた動き回っているからね…二人の老後なんてなかったんですね」「男は奥さんに先立たれたら何にもできないの。夕方になると包丁の音が聞こえない。男って情けない」

〈“1から10まで私ひとり”〉では、妻が担っていた暗黙裡の役割に気づき始め、全て自分で引き受けなければならないことが語られた。「今ではもう1から10まで私ひとり。掃除洗濯、お風呂は焚いて掃除をしなければならない。全部ひとりだ。分担はない」

②〔試行錯誤〕は〈ひとり分の食事を作る難しさ〉〈自分なりの家事方法を模索する〉から成る。

〈ひとり分の食事を作る難しさ〉では、ひとり分の食事の加減の理想と現実の差を我が身で体感していくことで、状況に合ったやり方を編み出していくことが語られた。「結局自分が好きなものだけ作る。作るのが難しいんだね。1人前ってなかなか難しい。その加減が分からないからこれもこれもと入れ一回にどっと作っちゃうんだね。2日も3日も同じものを食べている。まあ今の時期は相撲観ながら、飲みながら作っている」

〈自分なりの家事方法を模索する〉では、状況の必要性に応じて買い物や洗濯、掃除を行おうとする

が、妻が行っていたような方法や実施タイミングが分からず、節約の視点ではなく自分が納得できるレベルでよいとすることが語られた。「洗濯は困りものだ。着る物がなくなってきたから洗濯機を回す状態」

③ [ペースを掴む] は〈自分の役割を見出す〉〈財産管理を見直す〉〈家族に迷惑をかけない〉から成る。

〈自分の役割を見出す〉では、子供の巣立ち、仕事の線引き、妻の死別を通じて縮小されゆく社会と繋がりの中に自分の存在意義を感じられる活動を見つけ充実感を得ることが語られた。「女房が亡くなって、自分が責任や目的を持って何かをやる必要がある。かといって子供に口出せば余計なお世話になる。お墓参りや残していった植物の世話は僕にしかできない仕事」「(地域の活動に対して) 少しでも役に立って、少しでも自分の生活の糧にしていこうと思っています」

〈財産管理を見直す〉では、金銭管理の技術を身につけ将来を見通しながら細々と生活を続けていくよう努力することが語られた。「皆年金生活の人が多い。現実をみた上で生活していくのが一番良い」「二人で作りに上げてきたものも片方なくなればどうにもならない。どうしてほしいという話し合いもしなかった。考えておかないと大変」

〈家族に迷惑をかけない〉では、他の家族員の生活スタイルを崩さないよう気かけながら今後迷惑をかけるであろう自分の立ち位置を意識した家族との距離を保つことが語られた。「以前の親父と子の関係ではいつまでも持たなくて、関係少しずつ変えないとこちらが不利になってくる。隣近所子供たちにできる限り迷惑をかけずに生活をしていきたい。誤った考えを注意してくれる人がいないのでよく考えて行動していきたい」「法事には来るだろうけど段々自分の生活になっていくと思う。それでいい。俺はその日まで元気でいてやろうと思う。子供に俺の家へ来いとは言っていない」

## 2) 死別認識カテゴリー

このカテゴリーは、がん終末期の妻との死別につ

いて対象者が感じたことを表し、〈湧き上がる悔いと悲しみ〉と〈“納得できた”〉を行き来しながら〈妻が常にいる感覚〉へと推移した。

① 〈湧き上がる悔いと悲しみ〉では、妻のがんの治療経過を思い出すと未だ落ち着かない心中の葛藤やそれに伴う情動が騒ぎ出すことが語られた。「あの時無理にでも医者連れて行けばもっと長生きできたと思う」

② 〈“納得できた”〉では、妻が希望していた場所で苦痛を和らげて穏やかに最期を看取れたことでがん終末期にある妻に良くしてあげられたと思うことが語られた。「今思うと妻と話し合いや色々な話できて納得できた」

③ 〈妻が常にいる感覚〉では、労苦をともにしながら二人三脚で過ごした日常を懐かしみ死別後の生活の中で超越的なものとして維持されている妻の存在や役割を感じるということが語られた。「頑張ってくれたことに恩返ししなければ。毎朝お水、お茶を仏壇にあげることで気持ちが楽になっていく。寂しさよりも安心する」「買い物行ってくるけど何か食べたいものあるかと聞くんだ。返事あるわけないのについて話しかける」

## 3) 周囲との関係性カテゴリー

このカテゴリーは、対象者が新たな日常性を構築する過程で周囲への見方が変化し、支えてくれる者の存在に気づけるようになっていったことを表す。物理的対人的に受動的な状態にある [内にこもる] 状態から、大勢ではなく気の知れた人と細々と関わることで〈安心できる居場所の気づき〉が得られるようになり、安心できる居場所で既存の関係が続くように自ら努める〈持ちつ持たれつのフラットな関係性構築〉へと推移していった。

① [内にこもる] は、〈“張り合いのない” 空間に浸る〉〈周囲のペースと相容れない〉から成る。

〈“張り合いのない” 空間に浸る〉では、自宅にひとり刺激のない状態にいる時間が長くなり、誰かと楽しみを共有することが少なくなった鬱々とした生活を送ることが語られた。「店辞めてひとりになっ

たら、最小限度は作るんだけど何かを作って食べたいとかっていう気持ちはもうないな。張り合いがないさ」「(妻に身なりを整えてもらい) スナックとかバーに行っていた。気取ってブランデーなんて格好つけていましたけれどね。今は格好なんていない。行かなくなったからなお辛いんですよ。家にいるのがね。」

〈周囲のペースと相容れない〉では、妻と一緒にいた時の自分らしさを失いやる気が起きず何もしたくないため周囲の働きかけについていけず、自分から新たな繋がりをシャットダウンすることが語られた。「先の生き方見定めていないし体力も完璧でない。俺の状況かわいそうすぎないか。元気になってすごい女房連れて来て二人で町内会の仕事を応援するから。俺、女房に会いたくてさ…断り方悪くして、近所の人たちに帰ってもらった」

② 〈安心できる居場所の気づき〉では、日が経つにつれて、ぽっかり空いた妻の存在を埋める同世代の友人や周囲の人々の存在に気づき安心することが語られた。「(同級生から) もう忌明けしたからパークゴルフしないかって (誘われて)。それでぼちぼち充実した日を過ごしているんだ。店やっていた時は一生懸命働いてお友達作れなかったんだ」

③ 〈持ちつ持たれつのフラットな関係性構築〉では、加齢により社会の第一線から退いたことで、仕事付き合いの利害関係からお金をかけない付き合いができる関係が家庭外にでき、情けをかけてもらっているのではなく対等な関係に感じられていくことが語られた。「ひとりだから注文したものの消化できない。自分から同級生の所に持って行く。皆は女房死んだこと知っているけどひとりだからどうのではない。逆に作ったものもらったりね」

#### 4) もてる資源カテゴリー

目に見える財産だけではなく、ソーシャルサポートや何十年と生きてきた中で獲得してきた個人の潜在的能力を表し、〈隙間を埋める支え〉と〈培われた生活力〉から成る。

〈隙間を埋める支え〉では、死別後悲しみで思う

ように動けない間、ある程度生活に困らないように支えてくれる人々がいることが語られた。「妻が亡くなる前まで妹が俺のおかずを持ってきてくれて家族内でフォローし合っていた。今は娘に頼んでいる」「基本的には私ひとり。息子夫婦が日曜日にレトルト持って来ます」

〈培われた生活力〉では、過去に生活スキル獲得の機会があり死別後もひとりで生活していく力の土台があることが語られた。「人生うまく世渡りしてきたのかな。食堂勤めて皿洗いして、見様見真似だね。簡単なもの作れるんだよ。芸は身を助ける。中途半端に世渡りした集大成」「会社の寮で女房と毎日掃除しながら50人分の食事作っていたのさ」

#### 5) カテゴリーに属さない概念

〈区切りとしての葬送儀礼〉では、生まれ育った時代背景から死者に関する伝統的慣習を重んじており、葬送儀礼が新たな形で妻の存在を形作ることに強い意味合いを持ち、亡き妻を軸とした生活から自分が軸となる生活に変わることが語られた。区切りを迎えて以降は、普通の生活に重きを置きその人なりの悲しみへの向き合い方をしていた。「葬儀や法要をきちんとやるという中高年の変なプライドね」「一周忌の区切り無事終わったから俺は俺で好きなことやっていいのかなって。ひとり生活だから。ちょっと旅行に行くから留守にするかもしれないと話しかけたんだ」

〈老体にずしっとのしかかる疲労感〉では、妻の介護による疲労の蓄積や死別に伴うストレスなどによって出現した身体症状を、加齢に伴う身体の衰えに結びつけることが語られた。死別後の疲労と加齢が重なり合うことについて「女房亡くなって胃の圧迫感がすごかった。医者も事情知っていて精神じゃないかって。本当の話、本当に疲れた」

〈命の儚さ〉では、妻の死や年齢を重ねた身近な人の死に遭遇することにより、自分も死に近づいていると実感し、残りの人生をどのように生きていくかを考えることが語られた。「どの夫婦でも早かれ遅かれひとりになる。会社を辞め、親、兄弟、妻が



亡くなり、徐々に世の中との繋がりが減っていく。これが年を取っていくことと納得している。あまりじたばたせず自分を追い詰めないように」「自分で頑張るしかないから徹底的に健康管理する。亡くなった人の始末をみていくことにもなるし」

〈長年のスタイル維持〉では、これまでの価値観や、何十年来慣れ親しんだ生活環境を崩したくないこだわりを持ち続けながら過ごしていることが語られた。「生活自体は夫婦できちやっているからね。共同して、何か言い合いながらも生活作っているからさ」一方、〔内にこもる〕状態の事例では、妻と過ごした生活環境へのこだわりを固持する語りが示された。「家は物置です。家具なかなか捨てられない。置いておきたいって思いも半分、早く捨てないとだめだって思う気持ちも半分」

## V. 考察

### 1. がん終末期の妻と死別して独居になった高齢男性の新たな日常性構築プロセス

対象者は死別後に〈湧き上がる悔いと悲しみ〉だけでなく〈“納得できた”〉という満足感も抱いていた。塩崎、中里（2010）は、がん診断からホスピスでの看取りを振り返るなかで行わなかったことに対する後悔がある遺族は、後悔がない遺族に比べて精神的に不健康で悲嘆が強いと報告している。本研究では、対象者なりにできる範囲の中で何かをしてあげられた満足感が死別後の新たな日常性構築の原動力となっていた。それゆえ看護師は、高齢男性が振り返った際に〈“納得できた”〉と思えるよう死別前からのグリーフケアを意識して介入することが重要であると考えられた。

【生活立て直し行動】では、妻がいない〔生活変化へ直面〕し、さらに一人前を作るにあたっての感覚が掴めず、節約の視点ではなく必要に迫られて家事に取り組み、思うようにできなくても自分が納得すればよいと〔試行錯誤〕することから、将来を見据え〔ペースを掴む〕ことができるように変化し

た。ここでは初めての経験の連続という要素を含む段階が生成された背景に着眼したい。がんの場合は、診断がついてからでも比較的身体機能は衰えず、終末期になって寝込んでしまうような期間があっても、それは比較的短く（辻川、2018）、死亡1ヶ月前頃になると状態が急激に悪化し、最期の2週頃には介護や処置が必要となる（恒藤、2009）終末期像を辿る。他方、非がん患者はADLと認知機能の低下があり、在宅療養期間が長く、改善可能な急性増悪と終末期の区別が困難（横山、上田、2015）である。要介護度の高い状態で長期間介護を担う過程で〔試行錯誤〕や〔ペースを掴む〕は徐々に介護生活に取り込まれると推察された。本研究では、がん特有の終末期像により夫婦間の家庭内外の役割移行が十分に果たされず、独居になって初めて直面することの連続にある日常が明らかになった。また本研究では、終末期がん患者が夫婦のみの世帯の女性であり、家事の習慣がない夫への介護負担の遠慮から在宅での看取りを諦めたことも推測された。対象者は妻の思いをどれ程汲んでいるかは定かではないが、妻の自己決定に沿うことができ、希望に沿って良くしてあげられ〈“納得できた”〉と捉えていた。緩和ケア病棟という終末期がん患者の苦痛緩和や悲嘆の援助を役割のひとつとしている専門的な環境での看取りを前提としていたため、満足感に関する語りが多いことは否めない。実際、がん患者の看取りは一般病棟や在宅、施設でも行われているが、家族ケアに費やすことのできる労力や時間に限界があり行き届かぬことが多々あると推測される。しかし、症状管理、特に痛みコントロールと愛する人が一緒にいること（小川、島内、河野、2001；Pollock, 2015）は療養の場を問わず行える。緩和ケア病棟に限らず様々な療養の場であってもグリーフケアを担う看護師の認識の在り方によりケア実践に繋げられることはあると考えられた。

第一線を引退し老年期に入った人たちは市民としての生活を送れるようになる発達課題（Havighurst, 2004）を有する。対象者は死別後に周囲か



ら社会参加を促されても、元来社会と交わらない生き方をしてきたため、自ら他者との交流に距離を置くことが価値観として存在していた。死別後に新たに友人関係を作り上げることよりも、大勢と関わるのではなく気の知れた人と細々と関わることを求め満足感を得ていた。そして安心できる居場所で別居家族や同年代の友人といった既存の関係が続くように努め、自分から家の外に出かけるようになった。これは周囲への見方が変化し、支えてくれる者の存在に気づけるようになったためと考えられた。沼田、吉谷、本間（2009）は妻と死別した夫の死別後1年間の感情のカテゴリーとして一歩踏み出す時期があると報告している。本研究でも対象者が妻を失った現実に向き合い、新たな形で妻の存在を形作ることに強い意味合いを持つと判断し〈区切りとしての葬送儀礼〉を概念生成した。死に関わる儀礼や慣習は亡き妻のためだけの行事ではなく、悲嘆過程や生活の区切りに大きな意義を持っていた。区切りを迎えて以降は、活動性のある時間の使い方を望み何かに熱中して悲しみを紛らわすよりも、普通の生活に重きを置きその人なりに悲しみへ向き合い、別居家族と適度な距離感を保って行動をとっていた。現代の高齢男性にとって独居であっても家族としてあり続けるために〈区切りとしての葬送儀礼〉の尊重が重要と考えられた。

日常性構築滞りの場合は、〈長年のスタイル維持〉の信念を固持し、【もてる資源】が充足しておらず、[生活変化へ直面]している時間が長く[内にこもる]状態が続いていた。死別後の遺族の精神健康状態は時間の経過に伴い有意に改善する（坂口、柏木、恒藤他、2000）と報告されているものの、本研究では時間経過の視点のみならず、〈隙間を埋める支え〉である周囲の状況や〈培われた生活力〉〈長年のスタイル維持〉といったこれまでどのように生活を送ってきたかによる個人差が大きく影響していると明確にできた。

## 2. がん終末期の妻と死別する高齢男性への看護実践に対する示唆

家族発達理論の完結期（鈴木、渡辺、2012）は、配偶者を失った後、最後まで生きがいを見いだし、心身ともになるべく自立して生活できるように公私にわたるソーシャルサポートを受け入れる課題がある。本研究では、高齢男性が加齢に伴い衰退するだけではなく、それまでの人生で得てきた【もてる資源】を持ち合わせて生活していたと明確にでき、新たな関係作りを目的とした社会資源の投入や社会参加の促しだけが支援の在り方ではないと導き出された。看護師は高齢男性の特性を踏まえた上で、高齢男性なりの社会に距離を置く〈長年のスタイル維持〉という価値観や満足感と行動を支える介入や、高齢男性の築き上げてきた潜在的な力や周囲の支えである【もてる資源】に着眼することにより、完結期への移行を支えると示唆を得た。

## 3. 研究の限界と今後の課題

本研究では、緩和ケア病棟でがん終末期の妻と死別して独居になった高齢男性の新たな日常性構築プロセスについてのみ説明力を持つという方法的限定性がある。そのため、本研究結果は終末期がんの妻を看取った高齢男性への支援に応用可能と考える。本研究の結果から、長年連れ添ってきた妻にがんで先立たれた後、死別をどのように認識し日々の生活を送ってきたのか、どのように日常性構築行動をとってきたのかが明らかとなり、援助者が行う支援の具体的な示唆が得られた。本研究で得られた知見を基に、入院中の家族に対する支援を臨床にフィードバックすること、その支援成果を分析すること、病院内のみならずコミュニティケアとの連携方法を検討していくことが今後の課題となる。

## VI. 結 論

がん終末期の妻と死別して独居になった高齢男性の新たな日常性構築プロセスには【生活立て直し行動】、【死別認識】、【周囲との関係性】、何十年と生

きてきた中で獲得してきた【もてる資源】があった。高齢男性は【死別認識】や【もてる資源】の影響を受けながら【周囲との関係性】の変化に対応し、別居家族や同年代の人々との相互作用の中で【生活立て直し行動】がとれるようになっていった。日常性構築滞りの場合は、〈湧き上がる悔いと悲しみ〉が強く、〈長年のスタイル維持〉の価値観に固執し【もてる資源】が充足しておらず、[生活変化へ直面]している時間が長く[内にこもる]状態が続いていた。

以上より、高齢男性にとって〈“納得できた”〉と見える看取り、【もてる資源】への着眼、〈区切りとしての葬送儀礼〉や〈長年のスタイル維持〉の価値観を尊重した関わりが、日常性構築プロセスにおいて重要と示唆された。

謝 辞

研究に快くご協力いただきました対象者の皆様に深く感謝申し上げます。本論文は、山形大学大学院医学系研究科に提出した修士論文に加筆・修正を加えたものであり、かつ、公益財団法人笹川記念保健協力財団2018年度奨学金支援完了報告書において報告した研究概要を含み、第39回日本看護科学学会学術集会にて発表したものである。

各著者の貢献

SAは研究の着想から最終原稿作成に至るまで、研究プロセス全体に貢献；MFは研究の着想およびデザイン、分析、解釈、原稿への示唆および研究プロセス全体への助言。すべての著者は最終原稿を読み、承認した。

〔受付 '19.10.16〕  
〔採用 '20.07.16〕

文 献

Havighurst, R. J. / 児玉憲典, 飯塚裕子, ハヴィガーストの発達課題と教育：生涯発達と人間形成 (新装版)：159-172, 川島書店, 東京都, 2004  
 東 清巳, 永田千鶴：男性高齢者の妻喪失後におけるアイデンティティの揺らぎと対処, 熊本大学医学部保健学科紀要, 1：47-56, 2005  
 Holloway, I., Wheeler, S. / 野口美和子監訳, ナースのための質的研究入門—研究方法から論文作成まで—(第2版)：246-261, 医学書院, 東京, 2006  
 Holly, G. P., Paul, K. M.: Grief and acceptance as opposite sides of the same coin: Setting a research agenda to

study peaceful acceptance of loss, British Journal of Psychiatry, 193(6): 435-437, 2008  
 Holmes, T. H., Richard, H. R.: The social readjustment rating scale, Journal of Psychosomatic Research, 11(2): 213-218, 1967  
 木下康仁：ライブ講義M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて—, 132-159, 弘文堂, 東京, 2007  
 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い—, 131-172, 弘文堂, 東京, 2003  
 Kirby, E., Kenny, K., Broom, A., et al.: The meaning and experience of bereavement support: A qualitative interview study of bereaved family caregivers. Palliat Support Care, 16(4): 396-405, 2018  
 近藤真紀子, 佐藤禮子：未成年の子供を持ち妻をがんで失う壮年期の夫の苦悩, 千葉看会誌, 13(1)：94-101, 2007  
 厚生労働省：平成30年(2018)人口動態統計の年間推計. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikai18/index.html>. (2019年10月2日)  
 黒江義昭, 辻河昌登：妻をがんで喪った夫の体験に関する心理臨床学的研究—ナラティブ・アプローチを用いて—, 発達心理臨床研究, 17：89-99, 2011  
 Milberg, A., Olsson, EC., Jakobsson, M., et al.: Family members' perceived needs for bereavement follow-up, Journal of Pain and Symptom Management, 35: 58-69, 2008  
 室屋和子, 田島 司：配偶者と死別した男性高齢者の心理過程と社会生活への再適応, 産業医科大学雑誌, 35(3)：241-246, 2013  
 沼田靖子, 吉谷優子, 本間仁子：死別後1年間の夫の感情の変化に関する研究, ホスピスケアと在宅ケア, 17(3)：245-253, 2009  
 小川恵子, 島内 節, 河野あゆみ：在宅ターミナル期におけるがん患者の死別後の家族と看護職による訪問看護の評価, 日本看護科学会誌, 21：18-28, 2001  
 大島尚子, 村岡宏子：がんで妻を失った男性遺族の死別後における心理的状态と遺族会参加の意義, 東邦大学看護研究会誌, 4：1-10, 2007  
 Pollock, K.: Is home always the best and preferred place of death?, British Medical Journal, 7: 1-3, 2015  
 坂口幸弘, 柏木哲夫, 恒藤暁他：配偶者喪失後の時間経過と精神的問題との関連, ターミナルケア, 10(1)：71-76, 2000  
 塩崎麻里子, 中里和弘：遺族の後悔と精神的健康の関連：行ったことに対する後悔と行わなかったことに対する後悔, 社会心理学研究, 25(3)：211-220, 2010  
 鈴木はるみ, 滝川節子：配偶者との死別体験を有する男性の孤独感と関連要因, ホスピスと在宅ケア, 13(3)：238-243, 2005  
 鈴木和子, 渡辺裕子：家族看護学—理論と実践 (第4版)—, 34-60, 日本看護協会出版, 東京, 2012  
 立野淳子, 山勢博彰, 山勢善江：国内外における遺族研究の動向と今後の課題, 日本看護研究学会雑誌, 34(1)：161-170, 2011  
 辻川真弓：これからの緩和ケアと看護が担う役割, 三重看

護学誌, 20 : 7-15, 2018  
恒藤 暁 : 最新緩和医療学 (第9刷), 11-24, 大阪, 最新医学社, 2009  
山田忠雄編 : 大きな活字の新明解国語辞典 (第7版), 1147,

三省堂, 東京都, 2012  
横山まどか, 上田 泉 : 非がん患者の在宅終末期ケアに関する国内外の研究動向, 札幌保健科学雑誌, 4 : 51-58, 2015

## The Process of Establishing a New Day-to-day Routine by Elderly Men Whose Wife Died From Terminal Cancer and Moved on to Living Alone

Shiho Asano<sup>1)</sup> Midori Furuse<sup>2)</sup>

- 1) Nursing Doctoral Program, Yamagata University Graduate School of Medical Science
- 2) School of Nursing, Faculty of Medicine, Yamagata University

**Key words:** cancer, elderly men, establishing a day-to-day routine, spousal bereavement

**Objective:** This study aimed to elucidate the processes involved in establishing a new day-to-day routine by elderly men whose wife died from terminal cancer and moved on to living alone.

**Methods:** The subjects were 10 elderly men who had lived with only their wife before she had died of terminal cancer at least 5 months earlier in the palliative care ward. Semi-structured interviews were conducted, and verbatim records of the interviews were analyzed using a modified grounded theory approach.

**Results:** The process of establishing a new day-to-day routine by elderly men whose wife died from terminal cancer and moved on to living alone consisted of the categories “acting to rebuild a life”, “bereavement awareness”, “relationships with those around them” and their “resources” which had been acquired over decades of life. “Bereavement awareness”, “relationships with those around them” and their “resources” affected the processes of “acting to rebuild a life”.

**Conclusion:** The results suggested that for elderly men, satisfaction with how they attended to their wife in her final days, a focus on their “resources”, and factors related to respect for the value of the funeral ceremony as an important endpoint and the value of maintaining a longstanding lifestyle are important for the process of establishing a day-to-day routine.